

## 巻頭言

# 今後の土地改良事業のあり方と協会の役割

株式会社 安藤・間 代表取締役社長 福富 正人



本協会の理事を務めております福富です。役員として微力ながら、歴史ある本協会の更なる発展に尽力してまいりたいと思っておりますので、よろしく願っています。

この原稿依頼を受けた直後に発生した令和二年七月豪雨で多くの方々が亡くなりました。ご冥福をお祈りするとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

私は佐賀県出身ですが、ご承知のとおり佐賀は古くより干拓で農地や生活の場を広げてきました。有明海は干潮時と満潮時の潮位差が約6mにも及びます。このような過酷な条件下に佐賀平野は存在しますが、第一線の干拓堤防と広域の排水対策があればこそです。干拓は土地改良（農業土木）政策として行われており、我が郷里は土地改良の成果が存分に発揮されている地域であります。

入社後の土地改良とのかかわりとしては、若い時に、鬼怒川から取水する幹線水路の工事を担当しましたが、その後、九州支店長時代には地下ダムを弊社で施工しましたが、地下にダムを造るという発想に驚いたとともに、一般の方々へのPR不足を感じました。そういったこともあり、弊社では技術研究所があるつくば市の南つくば土地改良区管内で、平成二十一年から農業ボランティア活動に取り組み、用水路の清掃や草刈りなど年三回の共同活動を通じて、地域の皆様との交流を継続しています。

さて、最近の農業・農村を取り巻く状況は、農業の担い手の減少・高齢化や農産物輸入拡大の圧力など急激に変化しています。これらへの対応は、大区画化の水田整備の推進による経営の大規模化やICTを活用して高度の環境制御を行う植物工場等での周年・計画生産による農業の合理化が一つの解決策でないかと思えます。

土地改良事業のあり方も時代に連れて変化してきています。食糧

増産が目的の時に干拓された秋田県八郎潟に、今年に入って立ち寄りましたが寒風山から見たその全景は圧巻でありました。当時は、農業用水開発のためのダム、頭首工、用水路の建設や、農地拡大のための農地造成、干拓、排水改良などが主流でしたが、最近では基幹施設の耐震化や老朽化した施設の改修などが多くなってきています。

また、毎年のように発生する異常気象によりため池の被災が増加しているように思われます。一方で、農業用ダムが洪水調節機能の役割を担い、活躍の場が広がっていることは喜ばしいことです。

これらの状況変化に対応して、農業用施設の改修、耐震化は、農業用水を使用しながらの施工となり、構造物の新設以上に工夫が求められます。また、建設業就業者の高齢化による労働力不足に対応して、ICTを活用した情報化施工が進みつつあります。このような中で、本協会の会員は最先端の土木技術に精通しており、多様な施工経験があります。現場条件は千差万別ですが、技術的な課題に有効な対処方針を示すことができます。

この数年の活動で、農政局と当協会の意見交換の場が確立されています。私も関東支店長時代には、農政局との意見交換会に何度か出席しましたが、局長はじめ幹部の方々との忌憚のない意見交換には驚いたことを覚えています。このような場を通じて、土地改良の抱える課題について、技術面から解決に繋がる提案も可能ではないかと思えます。

今回のコロナ禍によりウェブ会議が大きくなりましたが、工事現場の可視化や遠隔確認の推進等、国の重要な施策である土地改良に関係する団体として、政策につながるような提言等を行うこともこれからの協会の役割ではないでしょうか。